

はじめの古文書講座

其三 於成の手紙を読んでみよう (一)

今回取り上げるのは、6月7日(日曜日)まで開催中の企画展「あの人の家族への手紙 幕末維新」で展示中の島津久光の娘・於成の手紙です。於成が生まれたのは嘉永六(一八五三)六月、まさにペリーが浦賀に来航し、世の中が大きく変わろうとするその時でした。当時、父・久光は、島津一門家筆頭の重富島津家の婿養子として鹿兒島城下の重富邸(大龍寺(現・大龍小学校の地)の隣)に住んでおり、於成もここで生まれました。安政五(一八五八)年、第十一代藩主・斉彬が急死し、その遺言により久光の長男・茂久(忠義)が藩主の地位を継ぐと、文久元(一八六一)年四月には、久光も本宗家に復帰し、さらに翌二年二月には、鹿兒島城二之丸に入り、「国父」として藩政の実権を握ります。於成の鹿兒島城での生活もこの時始まりました。この手紙が書かれたのは文久二年で、於成が一〇歳(数え歳)、今でいうと小学三年生の時です。それでこれだけの筆使い。悪筆の私はただただ感心するばかりです。

さて、解説に入る前に。この手紙は一枚の紙を真ん中で半分に折って書かれています。このような紙の使い方を「折紙」といいます。昔は手紙を出す際、本文が書かれている紙に、白紙(これを礼紙といいますが)を一枚添えて出すのが礼儀とされていましたが、折紙のように紙を半分に折ることで礼紙を省略する場合もよくありました。また、この手紙は上半分で収まっていますが、文章が長くなると、紙の上下を入れ替えて、再び真ん中の折り目に向かって、続きが書かれます。この場合には、礼紙を添えることになります。折紙は、さらに横に何度か折られ、宛先が書かれた⑬行の面を上にして、右の包紙(懸紙ともいいます)で包んで出されたようです。⑬行の面が、他の部分と比べると、少し日焼けしているのはそのためです。